

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年七月三十一日(土曜日) 午後五時開演

狂言 杭か人か(くいかひとか)

「杭か人か」と闇夜に問うて棒で突けば、「杭」と答えるのでひと安心、杭の始末にかかると「うつけ者め」と叱られます。太郎冠者の留守番ぶりを疑って、主人が見張っていたのでした。太郎冠者は日頃主人の留守に外出する癖を告げ口され、今日は主人にきつく言い置かれて、主人は今頃酒宴の盛りでしょうに、自分は酒を飲みに出ることもかありません。横になって謡うと面白いとはいえ、目が冴えて眠れません。太郎冠者はぼやきながらも夜回りに出ましたが、ぼやきはすべて主人に立ち聞かれ、いつもの怠慢や臆病が見顕されました。

能 吉野静(よしのしずか)

佐藤忠信(ワキ)が出て、「吉野に身を隠す判官義経は衆徒の心変わりを察知し、密かに山を下りることにした、拙者はその防ぎ矢を命じられた」と述べ、大講堂で行われる衆徒の詮議に、都道者(都からの参拝者)を装って紛れ込みます。偶然静御前(シテ)と出会った忠信は、互いに時間稼ぎをして主君を無事に落とす策を示し合わします。そして大講堂で衆徒に都の情報を求められた忠信は、「頼朝・義経の兄弟は仲直りする。義経を守るのは一騎当千のつわものが揃う」と答え、迫撃するのは得策でないと思わせます。忠信は勝手明神に駆けつけ、ここでも都道者を装って静に法楽の舞を急がせます。静は衆徒に憤りを忘れさせ、神に納受されようと舞い始めます。静は「梶原景時の讒言は順義にかなわず、頼朝の誤解も解けて義経は西国を分与されよう。迫撃したところで名のある精兵どもを討ち取ることは至難の業」と説き、舞の面白さに衆徒を釘付けにし追及の気持ちを鈍らせます。こうして忠信の謀り事(はか)のより難なく主君を逃した静は、願いを成就して都へ帰ったのであります。(西村 聡)

シ テ (静) 面 (増又は小面) 静烏帽子 鬘 鬘帯 箔 緋大口 腰帯 長絹
扇

(六時半頃終了予定)